

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

観光を再考する、観光の人類学を再構想する〈共同研究〉

グローバル化時代における「観光化／脱一観光化」のダイナミズムに関する研究〉

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 賢太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009495

観光を再考する、 観光の人類学を再構想する

文 東 賢太郎

いままさに、「観光」が現代社会のなかで急速に存在感を増している。観光の領域は、21世紀を代表する巨大産業としてグローバルからナショナル、ローカルにいたるすべてのレベルで急成長し、政治経済のみならず、文化や芸術、医療など各種の領域へと乗り入れている。巨大産業としての観光を支える根幹である人、モノ、情報の移動は、グローバル化による交通手段やメディアの拡充により今後ますます促進し、人々はアウトバウンドとインバウンドの双方の流れの中でゲストとして、またホストとして観光の当事者になり続けていこう (Smith 1989)。

その流れの中で、人文社会諸科学は観光の実相をとらえるべく、さまざまな分野からアプローチを試みてきた。文化人類学もやや遅れながら、北米を中心に1980年代以降、日本では1990年代後半から観光という現象に着目するようになった。しかしその後、観光社会学ではS. ラッシュやJ. アーリ (Lash and Urry 1993) らのグローバル化論と関連付けながら新たな理論的展開を遂げたのに対し、人類学内部ではその現状をうまくとらえきれず、2000年代以降、観光研究は停滞しつつあるといえる。

「観光化」と「脱-観光化」

そして現在、観光の形態はさらに多様化している。たとえば、戦争など負の歴史を次世代へと伝えるもの (ダークツーリズム)、移住をうながすもの (移住観光)、自然と人間の共存を教育するもの (エコツーリズム)、アニメ作品などのファンと交流をはかるもの (コンテンツツーリズム)、衰退した地域社会を再興させるもの (地域文化観光)、などである。つまり、これまでまったく別々の文化現象だったものが、観光という文脈に包含されつつあるといえる。これらを本共同研究では、「観光化」という現象として包括的に理解する。

他方、これまで観光の文脈で語られてきたものが、環境破壊や地域住民と観光客とのコンフリクトの増加などにより、制限され、文脈をずらされるという現象も起きている。本共同研究では、この動向を「脱-観光化」というオリジナルの概念によってとらえていく。たとえば、筆者の調査地であるフィリピンのボラカイ島では、毎年国内外から殺到する観光客の受け入れによって深刻な環境破壊が生じ、地方行政の対応の遅れに業を煮やした大統領によって、2018年4月より6か月間の島の「閉鎖」が実施された。これは「観光化」が

過剰に進展することによって、結果としてその流れが中断されるケースだといえよう。また、2019年の愛知トリエンナーレでは、「表現の不自由展」が一時中止され再開された経緯が記憶に新しい。芸術祭という国際的なイベントにおいて政治的な問題が前景化することにより、芸術の「観光化」が中断され政治へと文脈が転換する「脱-観光化」の一例としても興味深い。そのほか、国外ではバルセロナ、国内では世界遺産の石見銀山など、「観光化」が過剰に促進することで、中止や中断とまではいかなくとも、ゲスト側が対処できる範囲に「観光化」を制限する動きも「脱-観光化」の一形態だといえるだろう。

本共同研究では、「観光化」と「脱-観光化」の2つを鍵概念として進めていく。この2つの概念は構想当初は正反対の現象であると想定していたが、研究計画をより詳細に検討していく過程で、むしろ「脱-観光化」とは急速に進む「観光化」の帰結や反応として生じる動向であると考えられるようになってきた。いいかえれば、「脱-観光化」とは「観光化」のその後や、今後の観光のあり方、あるいは「ポスト観光化」とも呼ぶうる現象なのかもしれない。いずれにしても、今後は、この「観光化」と「脱-観光化」の双方の動きを視野に入れることで、観光という現象を再考し、また観光の人類学を再構想することを目指していく。



環境破壊により緑の藻が大量発生したビーチ (2017年、フィリピン・ボラカイ島、東賢太郎撮影)。

目的と意義

本研究の目的は、①国内外の諸事例がいかんにして観光の文脈に包含され、また観光の文脈からずらされていったのか、その詳細を実証的に検討し、②グローバル化の議論を批判的に参照しつつ、人類学全体をみすえた新たな視座の構築を目指す、というものである。

観光形態の多様化は、先行研究 (Cohen 1988) でも述



回族集住地区のモスクを訪れる非ムスリム中国人観光客（2016年、中国・雲南省箇旧市沙甸区、奈良雅史撮影）。

べられてきた。しかしそこでは、これまで観光とみなされてきた固有の領域を前提とした、観光経験の多様化に着目する傾向がみられた。その後のグローバル化のなかで（そして本研究において）より重要なのは、従来ビジネスでも娯楽でもなかったものが「観光化」されていくという観光の外延の拡大である。

だがグローバル化が必ずしも一方向に進むのではないのと同じように、「観光化」も一様に拡大するわけではない。そこで同時に「脱-観光化」という動きが生じてくる。本研究は、個別事例の詳細な検討を足掛かりとして、この「観光化／脱-観光化」のプロセスをとらえるところに意義がある。それは一方向的なグローバル化論を批判的に再検証することにもなり、観光研究のみならず、文化人類学全体の理論構築にも新たな視座を提供するものとなるだろう。

期待される成果

本研究で期待される成果は3つある。

①観光社会学においてグローバル化は観光の推進力ととらえられているが、その際の観光とは多くの場合、マストゥリズムを指す。しかし本研究では、オルタナティブなツーリズムを含む「観光化」も、また一見正反対に思える「脱-観光化」の動きもグローバル化の影響としてとらえる。この「観光化／脱-観光化」という概念を基軸に理論化を行うことにより、2000年代以降、停滞感のあった観光人類学の議論を刷新する。

②本研究は、世界各地の諸事例を扱い比較を行う。各事例が個別社会に立脚しているという点で文化人類学的であるだけでなく、グローバル化や観光といったマクロな議題を提起する点において、今後の領域横断的・学際的な研究にも展開可能である。また観光という社会的に広範な現象を扱うので、学術の分野だけでなく、実務家、関係省庁や自治体との連携も可能である。

③UNWTO（国連世界観光機構）によれば、現在13億2,000万人が観光のために国境線を越えている。また日本でも、これまで国を支えてきた諸産業が衰退するなか、観光が次世代を支える産業へと移行しつつある（2017年の訪日外国人観光客は2,869万人で、前年比19.3パーセント増）。観光をめぐる動向は喫緊の研究対象であり、人々の関心も高い。そのため、本研究の成果を学生や一般の人々に伝えることで、より地域社会に還元することができる。

東 賢太郎（あずま けんたろう）

名古屋大学大学院文学研究科准教授。専門は文化人類学、フィリピン地域研究。著書に『リアリティと他者性の人類学—現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから』（三元社 2011年）、編著書に『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』（世界思想社 2014年）など。

実施計画

本研究は、9人のメンバーによる個別事例の検討と、それをふまえた理論構築を目指す。総論と各論がつねにフィードバックできるよう、各自のメンバーは双方を念頭に置いた研究を行い、全体としての統一感を保持できるようにする。

初年度は2回の研究会を行い、研究会全体の方向性を確認する。とくに「観光化／脱-観光化」という概念について議論を深める。

2年目は4回の研究会を行い、個別事例の検討に重点を置く。9人のメンバーはそれぞれ、日本、東アジア、東南アジア、アフリカ、オセアニアの事例を報告し、いかに各メンバーのフィールドにおいて「観光化／脱-観光化」が進展してきたのか、そのプロセスと当該社会の動態を報告する。欧米諸国やイスラム諸国、中南米など、メンバーで補えない地域は必要に応じてゲストスピーカー・コメンテーターを招聘し議論を行う。諸事例をふまえ、メンバーは当該社会の個性や特殊性を議論し、総論への架橋が可能なかを検討する。

最終年は4回の研究会を行い、成果報告としての出版に向けた打ち合わせと、総論の議論をより深め「観光化／脱-観光化」に関する理論構築を行う。



「人喰い族」を演じる島民（2018年、ヴァヌアツ・アネイチウム島、福井栄二郎撮影）。

参考文献

- Cohen, E. 1988 Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research* 15(3): 371-386.
- Lash, S. and Urry, J. 1993 *Economies of Signs and Space*. London: Sage Publications. (『フローと再帰性の社会学—記号と空間の経済』安達智史監訳、中西真知子・清水一彦・川崎賢一・藤間公太・笹島秀晃・鳥越信吾訳、京都：晃洋書房、2018)
- Smith, V. L. (ed.) 1989 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. (2nd ed.) Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (『ホスト・アンド・ゲスト—観光人類学とはなにか』市野澤潤平・東賢太郎・橋本和也監訳、京都：ミネルヴァ書房、2018)